

令和7年度 卒業生アンケート調査—就職先調査の実施報告—（リハ学科）

1. 調査名・目的

1) 調査名

仙台青葉学院短期大学 リハビリテーション学科 卒業生の管理者アンケート

2) 調査目的

- ①卒業生の就業先からの評価を把握すること
- ②教育課程・新人教育支援の改善に活用すること

2. 調査対象・方法

1) 対象者

本学を令和6年3月に卒業し、就職した病院・施設の卒業生の直属の上司または管理者

2) 方法

Google フォーム、5件法 26項目+属性・自由記述（2項目）

管理者向け：Google フォーム、5件法 26項目+教育体制満足度+属性・自由記述（2項目）

| 質問項目（自由記載は除く） | |
|---------------|---|
| 1 | リハビリテーションにおける専門的な基礎知識があると思う |
| 2 | 対象者やその家族、多職種スタッフの意見を丁寧に傾聴できていると思う |
| 3 | 相手の意見を正確に読み取ることができている |
| 4 | 患者様や多職種スタッフに対して、自分の考えや治療方針をわかりやすく伝えている |
| 5 | 記録や報告書などにおいて、自分の考えや観察結果をわかりやすく伝える文章を書いている |
| 6 | 個人情報保護や守秘義務を遵守できている |
| 7 | 患者様・対象者への適切な言葉遣いができている |
| 8 | 必要な資料をデータベースや文献・図書から検索し活用している |
| 9 | 情報モラルをもって情報の処理をしている |
| 10 | 一つの物事を複数の側面から考えることができている |
| 11 | 物事の先行きを予測してあらかじめ計画し行動できている |
| 12 | チームにおける自分の役割を把握してチームメンバーと協働できている |
| 13 | 後輩や実習生、またはチーム内の他者に対して適切な方向性を示し、共に目標を達成できるよう導くことができている |
| 14 | 業務の優先順位を的確に判断し、時間を意識して計画的に行動できている |
| 15 | 日常的に体調管理に努め、業務に支障が出ないよう自己管理を行っている |
| 16 | 業務や人間関係などでストレスを感じた際に、自分なりの方法で冷静に対処できている |
| 17 | 患者様・対象者の評価結果や観察データを用いて、状況を的確に判断できている |
| 18 | 対象者の評価結果や経過データをもとに、スタッフや上司に対して適切に報告・連絡・相談ができている |
| 19 | 自分自身の現在の状況（業務能力や勤務状況）を振り返り、課題を明確にしている |
| 20 | 本学の卒業生は、自分に与えられた業務目標の意義を理解し、その達成に向けて主体的に取り組むことができている |
| 21 | 業務上の問題に対して解決に向けた手順を整理し、冷静に行動に移すことができている |
| 22 | 自主的にリハビリテーションの質の向上を目指して、学び続ける姿勢がみられる |
| 23 | 組織や地域社会の一員として発展に貢献できる力があると思う |
| 24 | 自分の責任と能力の範囲を把握し、役割と責務を果たすことができると思う |
| 25 | 統合された知識・技術に基づき、根拠に基づいたリハビリテーションを実践できている |
| 26 | 社会的ルールに従って考え、行動している |

3) 調査期間

令和7年9月1日～9月30日

4) 回答項目

「とてもそう思う」「ややそう思う」「どちらともいえない」「あまりそう思わない」「そう思わない」の5段階。本学卒業生の能力・資質について、本学以外の他の教育機関の卒業生と比較する相対評価とし、卒業生が複数在籍の場合には個別の評価を求めた。

3. 結果

1) 調査対象者

卒業生 n=55名の直属の上司または管理者

2) 本アンケートの回答者

直属の上司または管理者 n=28

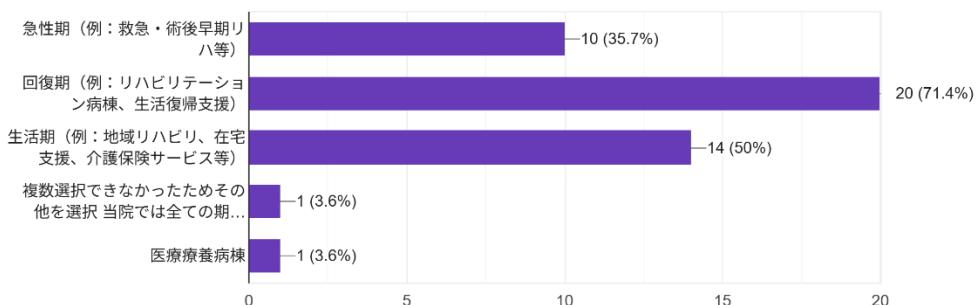
3) 項目別結果

①施設属性（重複選択）

期は、回復期が最も多く、次いで急性期、生活期であった。

貴施設は、以下のどの期に該当しますか？（複数選択可）

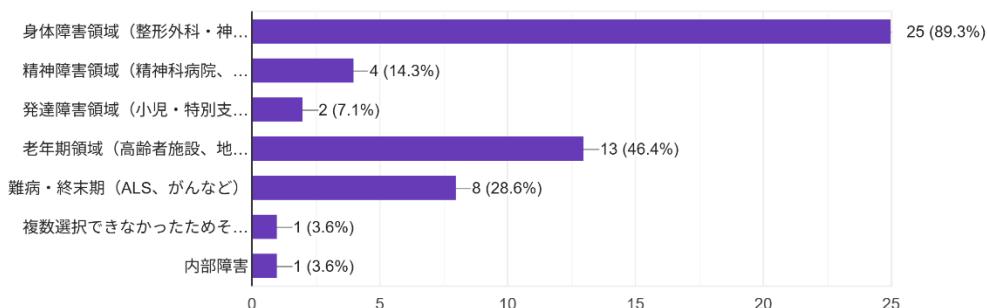
28件の回答



領域は、身体障害領域が最も多く、次に老年期、難病・終末期であった。

貴施設で主に対応している領域をお選びください（複数選択可）

28件の回答

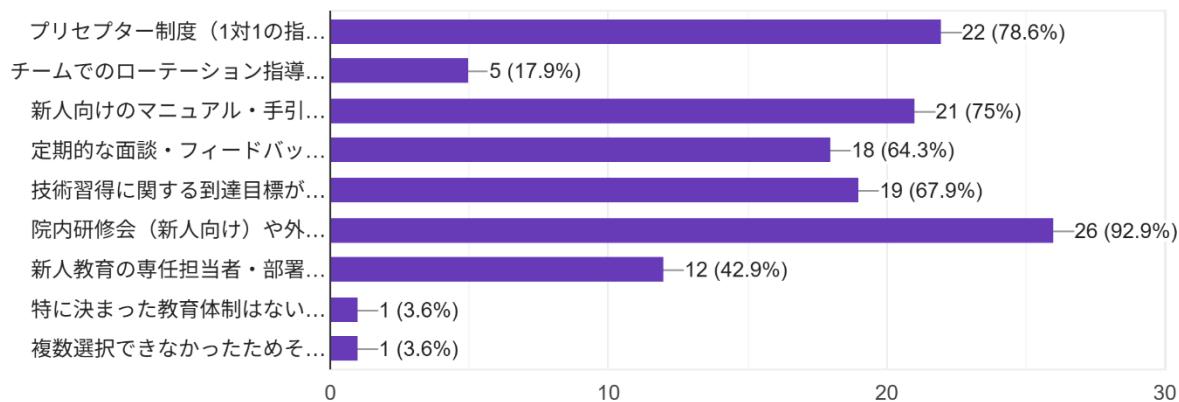


②新人教育体制

院内研修・外部研修機会（管 25）、プリセプター制度（管 21）、マニュアル整備（管 20）、到達目標（管 18）など、多くの施設で整備されていた。

貴施設において、新人職員に対する教育体制はどのように整備されていますか？（複数選択可）

28 件の回答

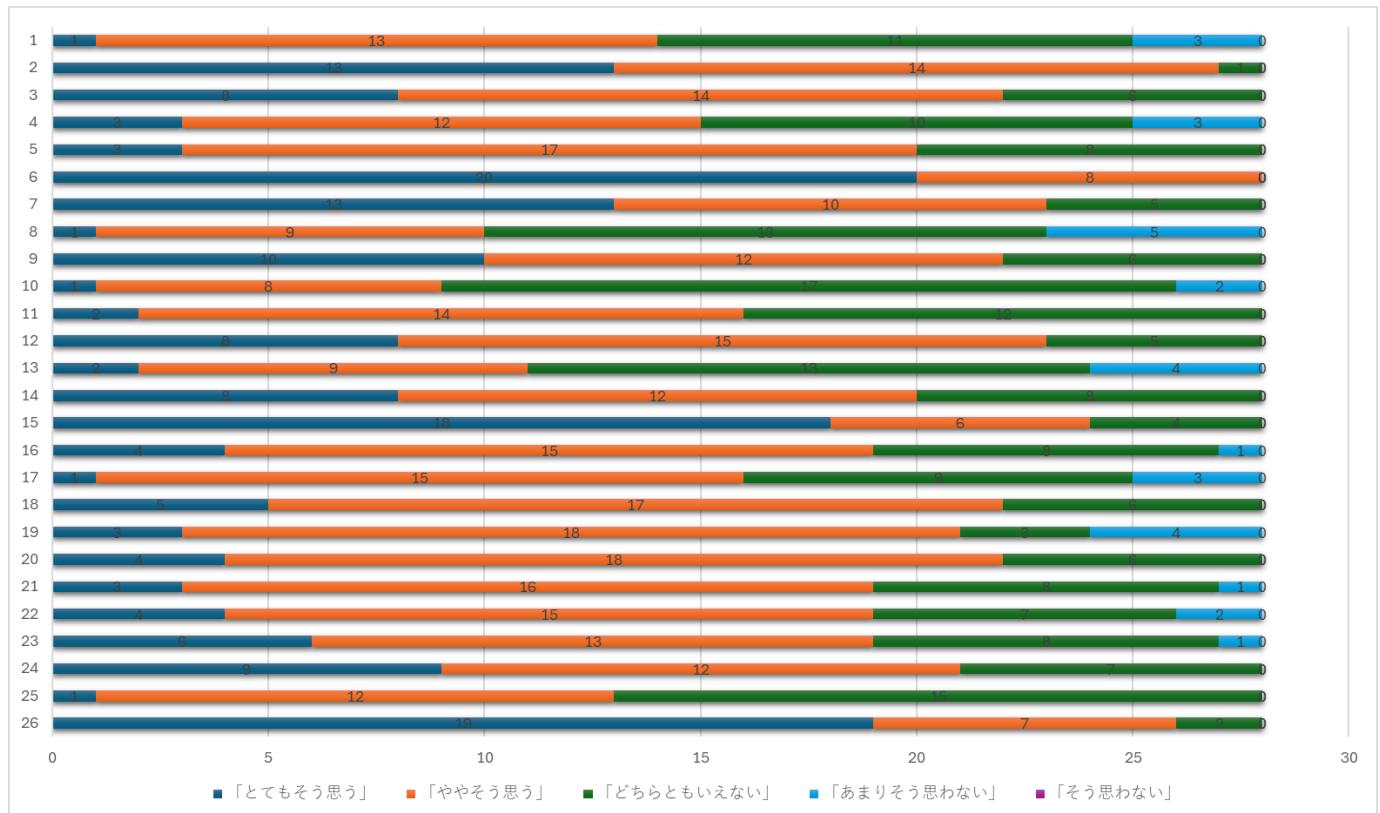


③上司および管理者のアンケートの回答数（令和 6 年 3 月に卒業生）

表 1. 質問の回答数

| 質問番号 | 「とてもそう思う」 | 「ややそう思う」 | 「どちらともいえない」 | 「あまりそう思わない」 | 「そう思わない」 |
|------|-----------|----------|-------------|-------------|----------|
| 1 | 1 | 13 | 11 | 3 | 0 |
| 2 | 13 | 14 | 1 | 0 | 0 |
| 3 | 8 | 14 | 6 | 0 | 0 |
| 4 | 3 | 12 | 10 | 3 | 0 |
| 5 | 3 | 17 | 8 | 0 | 0 |
| 6 | 20 | 8 | 0 | 0 | 0 |
| 7 | 13 | 10 | 5 | 0 | 0 |
| 8 | 1 | 9 | 13 | 5 | 0 |
| 9 | 10 | 12 | 6 | 0 | 0 |
| 10 | 1 | 8 | 17 | 2 | 0 |
| 11 | 2 | 14 | 12 | 0 | 0 |
| 12 | 8 | 15 | 5 | 0 | 0 |
| 13 | 2 | 9 | 13 | 4 | 0 |
| 14 | 8 | 12 | 8 | 0 | 0 |
| 15 | 18 | 6 | 4 | 0 | 0 |
| 16 | 4 | 15 | 8 | 1 | 0 |
| 17 | 1 | 15 | 9 | 3 | 0 |
| 18 | 5 | 17 | 6 | 0 | 0 |
| 19 | 3 | 18 | 3 | 4 | 0 |
| 20 | 4 | 18 | 6 | 0 | 0 |
| 21 | 3 | 16 | 8 | 1 | 0 |
| 22 | 4 | 15 | 7 | 2 | 0 |
| 23 | 6 | 13 | 8 | 1 | 0 |
| 24 | 9 | 12 | 7 | 0 | 0 |
| 25 | 1 | 12 | 15 | 0 | 0 |
| 26 | 19 | 7 | 2 | 0 | 0 |

質問の回答数：色付きグラフ

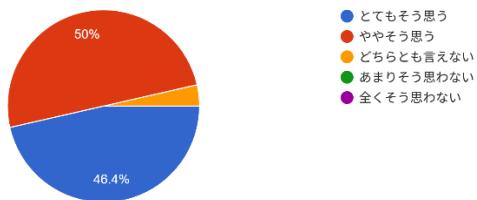


④結果

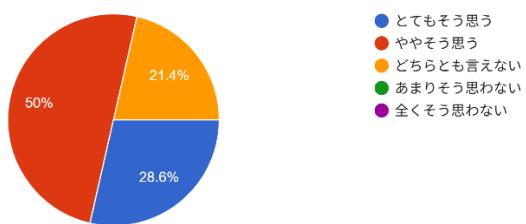
卒業生に対する上司および管理者の評価について、全体的に「とてもそう思う」と回答したのは23%、「ややそう思う」は46%、「どちらともいえない」は27%「あまりそう思わない」は4%、「そう思わない」は0%であった。肯定的評価率(=『とてもそう思う』+『ややそう思う』)は69%で、多くの項目で概ね良好な評価を得られたが、一部に低評価(50%未満)の項目も見受けられた。

評価が高い項目は、「他者の意見を丁寧に傾聴できる」「意見を正確に読み取る」「自分の考えをわかりやすく伝える」といった「傾聴力」、「意見理解」、「伝達力」など、対人スキルに関する項目では高い評価をえることができた。卒業後も現場での対人対応力・協調性が発揮されていると考えられる。一方で、「批判的思考力」「情報活用力」「リーダーシップ」「EBP実践力」に課題がみられた。

対象者やその家族、多職種スタッフの意見を丁寧に傾聴できていると思う
28件の回答



相手の意見を正確に読み取ることができている
28件の回答



記録や報告書などにおいて、自分の考えや観察結果をわかりやすく伝える文章を書いている
28件の回答

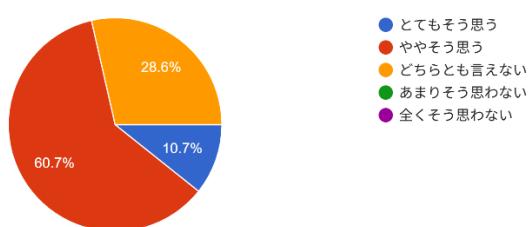


図. 高評価の質問項目

次に、主な課題項目として、肯定評価率が50%以下の項目を表2に示す。

表2. 低評価となった質問項目

| 質問項目 | 肯定的評価率 (%) |
|---|------------|
| 一つの物事を複数の側面から考えることができる | 32.1 |
| 必要な資料をデータベースや文献・図書から検索し活用している | 35.7 |
| 後輩や実習生、チーム内の他者を導く・方向づけることができる | 39.3 |
| 統合された知識・技術に基づき、根拠に基づいたリハビリテーションを実践できている | 46.4 |
| リハビリテーションにおける専門的な基礎知識がある | 50.0 |

⑤アンケート結果を受けての改善策

1) 批判的思考力の育成

- ・授業や実習において、複数の視点から症例を分析する課題を導入する。
- ・PBL (Problem-Based Learning) やケーススタディ形式の演習を増設し、思考の柔軟性を養う。
⇒4年制大学のカリキュラムでは演習科目が多く、**トランスレーショナルセミナーⅢ**の科目においてPBLを基盤とした科目も設置している。

2) 情報リテラシー・文献検索教育の強化

- ・学部1~2年次に図書館・データベース活用演習を体系化し、検索・引用・要約のスキルを強化する必要がある。
- ・EBP教育の一環として、臨床的疑問 (Clinical Question) から検索・評価・活用までを学ぶ実践的授業を展開する。
⇒理学療法研究法、作業療法研究法、トランスレーショナルセミナーI~IVの科目で、課題探索や研究テーマについて学修する機会がある。

3) リーダーシップおよび教育的指導力の育成

- ・チーム医療演習や臨床実習において、学生がリーダー役を経験する機会を設ける。
- ・卒業生や実習指導者による講話・ワークショップを実施し、現場で求められる指導力像を具体化する。
⇒理学療法専門科目、作業療法専門科目、共通科目であるトランスレーショナルセミナーI~IVの科目で、グループワークや発表の機会などを設けている。

4) EBP (Evidence-Based Practice) の定着

- ・講義・実習において、エビデンスに基づく判断のプロセスを意識化させる課題を設定する。
⇒4年制大学のカリキュラム構成に組み込まれている。

4. まとめ

今回のアンケート結果から、卒業生は概ね高い臨床実践力を発揮している一方、情報活用・批判的思考・リーダーシップなど、高度な専門職としての自律的成長に関わる力の育成が課題であることが明らかとなった。これらを踏まえ、4年制大学の学生に設置されている科目の特性を最大限に活かし、4年制大学のカリキュラムを段階的に進めながら、理学療法教育・作業療法教育を実施していく。将来、社会に貢献できる学生が本学より羽ばたいていく姿に期待したい。